

コロナ禍の学校生活における障がい児の

困難・不安感に関する実態調査 – 健常児と比較して –

秋山 史菜 (滋賀大学)

1. 目的

本研究の目的は、アンケート調査により、コロナ禍の学校生活における障がい児の困難（検討課題Ⅰ）および不安感（検討課題Ⅱ）を明らかにすることであった。また、同時に健常児にも同様のアンケートを行い、両者のデータを比較することで、障がい児特有の困難等についても検討を行った（検討課題Ⅲ）。

2. 検討課題Ⅰ（困難について）

コロナ禍の学校生活における「授業」、「休み時間」、「給食の時間」での困難について問うアンケートを行った。

- 1) 被験者：障がい児小学部 8 名、中学部 10 名、高等部 12 名の計 30 名であった。
- 2) 回答者：アンケート内容の難しさから被験者本人がアンケートに回答するのは困難であったため、被験者の担任・副担任の先生がアンケートに回答した。
- 3) 結果：小学部の「給食の時間」を除き、どの学部でも「授業」、「休み時間」、「給食の時間」に何らかの困難がある者の割合は半数以上であった。「授業」と「休み時間」では、児童生徒のマスク着用への困難に加え、教師のマスク着用により、口元が見えないこと等による困難も多くみられた。さらに、「その他困難がある」と回答した者の割合は、小学部の「休み時間」を除き全ての時間で 60%以上であった。その具体的な記述では「コロナ禍の長期休暇明けによる困難」等について、心身や学習に関する深刻な内容が見られた。また、困難の有無について学部間差を検討した結果、「授業」において「はい(困難がある)」と答える者の割合は高等部が小学部および中学部より有意に少なかった。

3. 検討課題Ⅱ（不安感について）

コロナ禍における「感染すること」、「勉強」、「運動・体力」、「友達との関係」に関する不安感について「不安～不安ではない」の 5 段階で問うアンケートを行った。

- 1) 被験者：障がい児中学部 6 名、高等部 7 名の計 13 名であった。
- 2) 回答者：簡単なアンケート内容であったため、被験者本人が回答した。
- 3) 結果：中学部・高等部共に、「感染すること」の項目に最も不安を抱いていた（中学部 66.7%、高等部 42.9%）。また、不安感に関する項目において有意な学部間差は見られなかった。

4. 検討課題Ⅲ（健常児との比較について）

- 1) 被験者：障がい児のデータと比較を行う健常児の被験者は中学生 98 名、高校生 41 名であった。
- 2) 回答者：被験者本人が回答した。
- 3) 困難の結果：障がい児群の中学部と健常児群の中学校の比較において、全ての時間で「はい(困難がある)」と回答した者は障がい児群が有意に多かった。
- 4) 不安感の結果：同様に高等部と高校での比較において、「感染すること」、「勉強」、「運動・体力」の項目で「不安ではない」と回答した者は障がい児群が有意に多かった。

5. 結論

半数以上の障がい児は学校生活において何らかの困難を感じており、その内容は深刻であること、また、不安感については障がい児は健常児より少ないことが明らかになった。

6. 主な参考文献

- 1) 四方田健二 (2020), コロナ感染拡大に伴う不安やストレスの実態：Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から, 体育学研究, 65, 757-774.